

フローベール全集

7

初期作品Ⅱ

GF

筑摩書房

訳 者

飯島則雄 (いいじま のりお)

桜井成夫 (さくらい なるお)

平井照敏 (ひらい てるとし)

山田 壽 (やまだ じゃく)

フローベール全集 7

初期作品Ⅱ

1966年7月20日第1刷発行

1976年10月10日第2刷発行

発行者 井上達三

発行所 株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町2-8

電話 東京291-7651

振替 東京6-4123

印刷 多田印刷

製本 矢島製本

目次

初期作品Ⅱ

狂人の手記

十一月

初稿 感情教育

附 録

ドン・ジュアンの一夜

解 説

一

三

五

一四

四九

四二

四七

初期作品 Ⅱ

狂人の手記^二

愛するアルフレッドよ

きみにこの文章を献呈する

この文章には、一つの魂があますところなく全部おさめてある。それはぼくの魂か？ 別のだれかの魂か？ ぼくははじめ内面の物語を作ってみたかった。そのなかで懷疑主義を絶望の果てまで押しすすめてみようとしたのだが、書いているうちに、少しずつ個人的な感動が寓話のなかにはいりこみ、魂がペンを動かして圧倒してしまった。

だからその点は、さまざまな臆測の謎のなかにそのままのこしておきたいが、きみならば臆測などしないだろう。

ただ、きみは恐らく多くの箇所、表現に無理があり情景を好んで暗くしている、と思うかもしれない。が、この文章を書いたのが狂人であることを、思いおこしてくれたまえ。また、もしも言葉が往々にして、

それが述べている感情をうわわわって見えたとしても、それは、いいかえれば、言葉が心の重みに屈したということだ。

さようなら、ぼくのことを心にかけて、ぼくの身になつてくれたまえ。

—

なぜこんな文章を書くのか？——これが何の役にたつのか？ ぼく自身でわかつているのか？ ぼくの考えでは、ひとに行為や執筆の動機をたずねようとするのは、たいそう愚かというべきだ。——読者にしたところで、狂人の手が書き綴るあわれむべき雑文を、なぜ開いてみたのかわかりますか？

狂人！ 忌むべきものだ。読者よ、あなたは、あなたは何者だ？ 自分をどんな部類にいれているのか？ 馬鹿者の部類か、それとも狂人の部類か？——もし選択を迫られれば、きみの虚栄心はまだしも後者の状態をとるだろう。そう、もう一度、ほんとうにたずねるが、修養にも娯楽にもならない書物、化学でも哲学でも農業でも悲歌でもなく、毒にも薬にもならない書物、鉄道につい

ても、株式取引所についても、人情の機微についても、中世の衣服についても、神についても、悪魔についても語らず、語るのは狂人のことという書物が、何の役に立つのか？ 狂人とはつまり世間というもののだが、この大阿呆は、幾百年このかた空間のうちにあって一步も進まず廻転し、わめき、唾をとばし、そして自分自身を引き裂いているのだ。

あなたがこれから読まれるものについて、ぼくもあなた以上にはわかっていない。というのは、これははっきりした草案、あるいはよく考えたうえの一貫した考えとか、一直線に引いた道筋にそって思想をたどらせるための目標とかを持っている、小説や戯曲ではないのだ。

ぼくは専ら、頭にうかぶものをそっくり紙のうえに移してみるだけだ。思い出、感想、夢想、気まぐれなどといっしょにぼくの思想を、考えたこと感じたことのすべてを、だ。笑うも泣くも、白も黒も、はじめは心より出たものの大袈裟な段落をかさねるうちに捏粉のように伸されてしまった嗚咽も、ロマンチックな比喩で冗長な涙も、何もかもだ。しかし、これからペン先を一束つぶし、インクを一瓶つかい果たして、読者をうんざりさせるし、自分自身もうんざりするかと思えば気が重くなる。笑うことと懷疑主義がすっかりぼくの習慣になってしまっ

たため、冒頭から結末に至るまで、たえまない諧謔にぶつかるだろうし、笑いを好む者は、ついには作者および自分自身を笑うことになりそうだ。

ひとびとは、この文章のなかで宇宙の意図や人間の道徳上の義務や美德や博愛を、どうして信じねばならぬかを覚るだろう。博愛か、これはやがて手にはいつたら長靴のうえにでも銘として記入させたくなる言葉だ。世間がそれを読み、どぶつぷちをはいまわる微生物にいたるまで、それを心に刻むようにだ。

このなかに哀れな狂人の気晴らし以外のものを読みとるのは、誤りというものだ。狂人なんだから！

ところで、読者におかれては恐らく結婚なさったばかりでしような。それとも借金を片つけたところでしょうか？

二

そこでぼくは、わが生活の物語を書くわけだが、——何たる生活か！ いや、ぼくは生活してきたのだからか？ ぼくは若いのだし、顔に皺はないくせに、心には情熱がないのだ。——ああ！ ぼくの生活はいかにも平穩だった。いかにも楽しげに、幸福そうに、静かで清らかそうに見えもする！ ああ！ まさに、その穏やかさ

といい、静けさといい、魂を屍とする墓場のごとしだ。

ぼくはほとんど生活してこなかった。世間というものを知らなかった。つまり、愛人も、おべっか使いも、下僕も、馬車も持っていない。いわゆる交際社会にはいたことがない。それというのも、その社会はぼくには常に虚偽と誇張に見え、くだらぬ飾り物に覆われて、退屈でもったいぶっているように見えたからだ。

さて、ぼくの生活だが、それはさまざまの事実ではない。ぼくの生活とは、すなわち一つの思想なのだ。

それでは現在のぼくを導いている、その思想とはなにか？ 世間ではみんながにっこり、みずから幸福と思う年ごろで、結婚もするし恋愛もする、情事という情事、名声という名声になんでも酔うひとが多い年ごろに、灯火きらめき宴の杯もあふれようというときに、ぼくはたった一人、丸裸で、およそ靈感にも诗情にも乏しい。死んでしまいたいそうに感じながら、じわじわと迫ってくる自分の苦痛に残忍な笑いをうかべているところは、血管を切り開かせ香水風呂につかって笑いながら死んでいったかの享楽主義者たちに似ているし、狂宴に疲れ、酔いっぶれて出てくるひとに似ている。

ああ！ この思想の生活はいかにも永く続いた！ まるであの九頭の蛇のように、そのすべての口でぼくを食

いつくそうとする。憂いと悲しみの思想、涙する道化の思想、瞑想する哲学者の思想だ。

ああ！ しっかり！ ぼくの生活においては、どれほど多くの時間が、永つたらしく単調に、考えること疑うことに、流れていったことだろう！ 沈む陽のよわよわしい照りかえしをうけ白らけた燠火を前にして、うなだれていた冬の日がどれほど多かったことだろう！ たそがれの野原で、遠ざかり拡がりゆく雲やそよ風になびく麦に眼を注ぎ、森のおののきを聞き、夜の大自然の吐息に耳傾けた夏の夕べのかずかずよ！

ああ！ 幼いころはなんと夢みがちだったことか！ いかにも哀れな狂人で、これという考えも積極的な意見もなかった！ 葉むらを垂れて、花びらの散るにまかせる木々のあいだを流れる水を眺めてみたり、青みがかった空のかなたの月が、ぼくの部屋を照らして壁に異様な形を描くの、寢床のなかでじっと見つめていたものだ。美しい日を前にして、あるいは春の朝の、白いもや、花咲く木々、花盛りの雛菊を前にして、恍惚としていたこともあった。

おなじように好きだったのは、——これはまた、このうえなく懐しくも楽しい思い出の一つだが、——海を眺めることだった。大波がかさなり合い、波がしらが泡と

碎けて浜に拡がり、小石や貝がらのうえをひいて行きながら鳴りさわぐのを、眺めるのが好きだった。

ぼくは、岩のうえを駆けまわり、大洋の砂をすくっては指のあいだから風のまにまにこぼしてみたり、海草を濡らしてみたりした。また、魂にあればどの活力と詩的で大らかな思想をこめて入りこむ、大洋の塩気をおびた新鮮な空気を、胸いっぱい吸いこんだ。広大さ、空間、無限、そういったものをぼくは眺めていた。するとあの果てしない水平線を前にして、ぼくの魂は深く沈んでいった。

ああ！だが、果てしない水平線、無量の深淵とは、そんなものではない。ああ！ちがう、もっと大きくもっと深い淵が、ぼくの前に口をひろげている。その深淵には嵐はない、もし嵐がおこるとすれば、深淵は嵐であふれかえるだろう……、だが深淵は空っぽだ！

ぼくは陽気だった、よく笑った、人生や母を愛していた。おお、お母さん！

いまでも思い出すのは、街道をはしる馬を見るにつけ、吐く息の湯気や馬具にじむ汗を見るにつけてあじわった、ささやかな喜びだ。単調でいながら拍子をとって吊帶を震動させる速歩が好きだった。やがて、停止すると、野原はすっかりしずまりかえった。馬の鼻孔から出る息

が見え、ゆれていた車がパネのうえでおちつき、風は窓ガラスに鳴っていた。そうして、それがすべてだった……。

ああ！騒々しく楽しげな、叫び声をあげる晴れ着の群衆にも、どれほど眼を見はったことだろう。嵐よりもっといきり立ち、嵐の狂おしさにもまして愚かしいひとの波。

二輪馬車や、馬や、武具や、軍隊や、軍服や、太鼓の連打や、騒音や、火薬や、町から町へと敷石道をころがっていく砲車が好きだった。

幼年期には、眼に見えるものが好きだった。青年期には、心に感じられるものを愛したものだ。成人してから、何も愛するものがない。

けれども、魂のなかにはいかにもたくさんのものを持っている！どれほど多くの秘めたる力が、どれほど多くの怒りと愛の波濤が、かくも弱い、柔弱な、衰えきった、疲れ果てた、涸れきった心のなかで、ひしめき合い砕け散ってゆくのだろうか！

生活をたてなおせ、群衆にまじれ！といわれる……が、折れた枝はどうして果実をみのらせ得よう？風にむしり取られて、埃のなかを引きずり廻された木の葉が、どうして緑をよみがえらせ得よう？そして何故に、か

くも若くして、これほど辛い思いをするのか？ どうしてなのか？ 恐らく、重荷を負うまえに疲れ果て、走りとおすまえに息を切らしてしまふ、そんなふうに生きるのが、ぼくの宿命だったのだろう。

ぼくはひどく熱中して読書し、仕事をした、執筆をした。ああー そのころは、いかにも幸福だったー 感きわまると、思想は人間にとって未知のあの領域に高く舞いあがっていった。それは地球も惑星も恒星もない領域だ！ ぼくは、もしあるとすればだが、神の無限よりもっと広大な無限を手にいれた。詩想がおのずと養われ、愛と恍惚の環境のなかでその翼をひろげたのだ。やがて、そうした至高の領域から言葉のほうへ降ってこなければならなくなったが、詩人の心のなかにたかまるあの諧調をどうして言語に訳せよう？ また、逞しく張り切った手がそれを包む手袋をひきさいてしまふように、文章をねじまげさせる巨人の思想をどうして言語に訳せよう？

そこでまたもや幻滅だ。それというのも、われわれは大地に、この氷の大地に触れており、そこではどんな火も消え、どんな活力もなえてしまふからだ！ どういう段階をへて無限から現実へ降るのか？ どうすれば少しづつ、詩想はそこなわれずにおりてゆけるのか？ 無限を抱くこの巨人をどうやって縮小するのか？

そのときぼくは悲しみやら絶望やらを折り折りに感じ、わが身を破る自分の力や、われながら恥ずかしいあの弱さを自覚した。なぜなら、言葉は思想の遠いかすかなこだまにすぎないからだ。ぼくは、何よりも大切な自分の夢と創造の境ですごした沈黙の幾ときかを、呪った。なにやらわが身を滅ぼす空しいもの、得体のしれないものを感じたのだ。

詩にあきると、瞑想の分野に没頭してみた。

手はじめに人間を対象とするあの由々しき研究にとりつかれた。人間を解明したい、仮説を詳しく分析しよう、もっとも抽象的な仮定も検討しよう、このうえなく空虚な言葉まで幾何学的にしらべよう、というのだ。

人間とは、あの未知の手によって無限のなかに投ぜられた砂の粒、深淵のふちであらゆる枝にさがるうとして、弱い足をもつ哀れな虫だ。徳や愛や利己心や野心にしがみつこうとする。そして、もっとすがらんがために、そういうものをすべて美德と考え、神につきまといてみたりするが、だんだん弱っていつて、手をはなし、墜落する……。

ありもしないものを理解しようと望み、虚無から学問をつくろうとする人間。人間、魂は神の姿を写しているが、その至高の天才でも一本の草の茎ひとつにひっか

り一粒の埃ほどの問題も解けないのだ。

こうして倦怠にとらわれ、ぼくはすべてを疑うに至った。若いくせに、ぼくは老いていた。魂には皺がよっていた。そして年老いてもなお元気で、情熱や信念にあふれるひとびとを見るにつけ、ぼくは自分自身に苦笑した。こんなに若いのに、人生とか愛とか栄光とか神とか、存在するもの一切から、存在するかもしれないものの一切から、あまりにも覚めきっているのだ。

それにしても、あの虚無への信仰を抱くまえに、ぼくは当然ながら恐怖を覚えた。深淵のふちで、ぼくは眼を閉じ、そこへ落ちた。

満足だった。このうえ下落することはなかった。ぼくは墓石のように冷たく、穏かだった。疑惑のうちに幸福を見出せるものと信じていたのだ。正気の沙汰ではなかった！　ここでは、ひとは際限のない空虚のなかをさまよう。そういう空虚は極まりなく、縁に近づけば恐ろしさに髪の毛がよだつのだ。

神を疑うことから、ぼくはやがて道徳を疑うに至った。道徳とは、法律というさらに不確かな足場のうえに、各時代がどうやら築きあげてきたもうい観念だ。

陰気で思いに沈みがちなそういう生活については、のちほどくまなくその経過をお話するが、妒ばたで腕を

組み、退屈で始終あくびばかりして、一日中ひとりぼっちですごした生活だった。ときどき眼を移して見るものといえば、近くの家々の屋根の雪や、陽ざしのおとろえた夕日や、自分の部屋の床や、あるいは煖炉のうえでいつもしかめっ面をし、人生を象徴し、人生のように冷やかで嘲笑的な、齒のぬけた黄色い髑髏^{どくろ}だった。

のちほど読者は、こうも打ちひしがれ辛苦に傷つけられた心の苦悩の一切を恐らく読むことになるだろう。こんなにも穏やかで平凡な、感情はあふれていながら事のまったく起らない、そんな生活の紆余曲折を知っていただけのことだろう。

すると読者はそのあとでいわれるだろう、なにもかもしかにも人をばかにしたことだ、からかっているのだ、学校でしゃべること、書物のなかでくだくだしく述べてあること、見られ、感じられ、話され、存在しているものはなにもかもそうではないか……と。

辛くて、とても終りまではいつくせないほどだ。いさ！　言おう。結局そういうものはみんな、情ないこと、煙のようなこと、空虚なことではないのか、と。

三

ぼくは十歳のときから学校^{コウガク}にはいり、早くもそこで人

間に対する深い嫌悪をおぼえた。こうした子どもたちの社会は、もう一つの小さな社会、つまりおとなのそれと同様に、犠牲者に対して無慈悲だ。

青春の無欲とか誠実とかをいくら云々してみたところで、大衆の不正、偏見と力の暴圧、利己主義などとかわりはない。青春！世のなかを健全に判断するひとびとの口にかかつては、狂気も夢想も、詩情も愚行も、同義語になる年ごろだ。ぼくは学校で自分の趣味をことごとく押し潰されてしまった。授業中にはぼくの意見の故に、休み時間には孤独を好む人づきの悪さの故に、だ。そのころからぼくは一人の狂人だった。

学校では従って孤独で退屈し、教師たちには小突きまわされ、級友たちには侮られて暮らした。ぼくは嘲弄好きで独立心の強い性分だったから、辛辣で人を食った皮肉で、一人の出来心にしろ全体の横暴にしろ等しく容赦しなかった。

いまでも眼にうかぶのは、教室の腰掛けにすわって、未来の夢に心を奪われているところだ。子どもの想像力ではこのうえなしの崇高なことを考えていると、教師がぼくのラテン語の詩を冷やかしており、級友たちにはやにやしてぼくを眺めていた。低能ども！連中が、このぼくを笑うとは！あの薄のろの、凡くらの、石あたま

の連中が、だ。このぼくは、精神は創造の境にひたり、あらゆる詩の世界に没頭し、連中のだれよりも偉いのだと自覚し、限らないよろこびを味わったし、わが魂の内奥の啓示を前にして天上の陶醉をもつ者だった！

ぼくは、自分が世界とおなじように偉大だと思っていた。ぼくの思想のほんの一つが、もしそれが雷のように火をおびていたならば、世界を粉々に打ちくだくことができるものと思っていた。哀れな狂人よ！

ぼくは若くして、二十歳で、栄光につつまれたところを想像していた。南の国々への遠い旅を夢に描いていた。東洋や広大な沙漠や、青銅の鈴をつけたラクダのひしめく宮殿を眼にうかべた。赤く陽に染まった地平線にむかって躍ねている牝馬たちが見えた。青い波、澄んだ空、銀の砂が見えた。南国のなま暖い海の香りをかいだ。すると、大きな葉のある蘆薈ろかいの蔭の天幕のしたで、ぼくのかたわらには、褐色の肌をした燃える眼差しめがめの女が、両腕をぼくにまわりつかせて、絶世の美女の言葉で話しかけてくるような気がした。

太陽が沙漠にしずみ、ラクダや牝馬たちが眠ると、虫が羽音をたててその乳房にとび廻り、夕風がぼくらのかたわらを過ぎていった。

そして夜がきて、あの銀の月が沙漠に青白い視線を投

げかけ、星が紺碧の空に輝くころ、暑く香くわしい夜の沈黙のなかで、ぼくは無量のよろこびを、天上の快樂を、夢みるのだった。

そうして、またもや栄光を夢みた。拍手のどよめき、空へむかうファンファーレ、月桂冠、風に散らされた金粉などをともなっていた。きらびやかな劇場の、着飾った女たち、灯火にきらめくダイヤモンド、重苦しい空氣、あえぐ胸。それから宗教的な瞑想や、火を噴くような激しい言葉や、涙や、笑いや、すすり泣きや、栄光への陶醉や、熱狂した叫び声や、群集の足踏み鳴らす興奮。やれやれ！ 虚栄だ、ばか騒ぎだ、虚無だ。

子どものころ、ぼくは恋を夢みた。青年のころは栄光を夢みた。成人してからは、墓場を夢みた。恋も栄光ももはやもたないひとびとの最後の恋だ。

ぼくはまた、いまはなき幾百年の古代、草葉のしたによこたわる種族たちの古代に眼をむけた。見れば巡礼や戦士の群れが受難の丘へと行進し、沙漠のなかで立ちどまって、飢えて死にかかり、かれらの探し求めようとするその神に、哀願していた。それから、神を罵り疲れて、あの果てしない地平線にむかってやはり歩き続ける。やがて疲れ果て、息を切らせてようやく旅の目的地に着いたものの、全世界から奉納された何の変哲もない石ころ

に接吻しようにも、すっかり打ちひしがれ、老いぼれている姿。

馬にまたがって駆ける騎士たちを見たこともあった。夜にはまた、大伽藍の暗がりのうちに、廻廊を歌声につれて天蓋にむかって進むひとびとの献花によって、飾られている内陣のすべてを。焼絵ガラスに照り映える灯明を、降誕祭の夜には、尖った屋根を雪に覆われ、光りかがやき、歌っている、古い街々をぼくは見た。

しかし、ぼくが愛していたのはローマ、古代ローマ帝国だ。狂宴のなかをのたうち、淫酒をあおっては高価な衣裳をよごし、美德よりも悪徳を誇りとした、あの美しい妃だ！ ネロよ！ 闘技場へはダイヤモンドをちりばめた二輪車を駆ったネロ、幾千の戦車、残忍な情事、途方もない酒宴の、あのネロよ。

古典の授業はそっちのけで、ぼくはおまえの度はずれた快樂や、血なまぐさい装飾や、ローマを焼き払うといった気晴らしに、想いをはせた。

そして、そういう漠とした夢想やら未来への夢やらに身をゆだね、くつわのとれた牝馬が急流をとび越え、山に登り、空を駆けるように、むこう見ずなその考えにわれを忘れ、あたまを両手にうずめて自習室の床を見つめたり、教壇にクモが巣をかけるのを眺めたりして、幾時

間もすごしたものだ。そして、われに返ってばかんと眼を見開くと、みんながぼくを笑っていた。ぼくときたらこのうえなしの怠け者で、何一つ積極的な考えをもったことがなく、どんな職業にも向きそうになく、人おのそのその分け前にあずかるべきこの世のなかにおいて、無用者であるかもしれない。要するに、何の役にも立たず、せいぜい道化者か、動物使いか、書物作りといったところだろう。

健康には至って恵まれていたが、ぼくのような気性では、現実の生活や他人との接触によって始終傷つけられ、神経質にいららすることがあって、そうなると、虫に刺されて苦しがる牡牛みたいに、猛り狂ってわれを忘れてしまうのだった。ぼくは、さまざまの夢を、恐ろしい悪夢をみた。

ああ……悲しく不愉快な時期。学校の白く塗った長い廊下をひとりでうろつき、フクロウやコガラスが礼拝堂のてっぺんからとび立つのを眺めたり、あるいは、油の凍ったランプに照らされた陰気な寝室で、じっと横になっていたのが、いまでも眼にうかんでくる。夜とはいえば、風が殺風景な細長い各部屋を陰気に吹きわたり、窓わくのなかのガラスをゆさぶりながら、鍵穴に口笛を吹かせているのを聞いていた。ランプをさげてゆっくり

と歩いていく巡回の男の足音を聞いていて、男がぼくのそばへ来たときには、寝入ったふりをしたものだ。すると、なかば夢、なかば涙で、本当に寝入ってしまうのだった。

四

それは恐ろしさに気も狂うばかりの、身の毛のよだつ幻想だった。

ぼくは父の家で寝ていた。家具はいずれも昔から保存されていたものの、ぼくの周囲にあるものは、それでもなお、すべて陰気な色合いをおびていた。冬の夜のこと、雪がほの白い明りを部屋のうちに投げかけていた。突然、雪がとけて、草も木も焦げて赤茶けた色合いを呈したところは、火事で窓が明るくなったみたいだった。入り乱れた足音がきこえ、だれかが階段をのぼってきた。暖かい風、いやなおいが、ぼくのところまで立ちのぼってきた。部屋の扉がひとりでに開き、だれかはいつてくるらしい。それが大ぜいで、恐らく七、八人はいたらうが、数えているいとまはなかった。連中は小さいのも大きいのもいて、顔じゅうあらい黒ひげで覆われ、兎器こそもっていなかったが、いずれも鋼鉄の刃物を口にくわえ、ぼくの寝台をとり巻いて近づいてくるとその齒

がきしんで鳴った。ぞおっとした。

かれらが部屋の白いカーテンをのけると、五本の指の血の跡がのこった。かれらは睫毛のない眼を大きく見開いて、じっとぼくを見すえた。ぼくもにらみ返したが、身動きさえできなかった。叫びだしたかった。

そのとき、まるで挺でもちあげたかのように、家が土台ごと浮きあがるような気がした。

かれらは、そうして永いことぼくを見すえていた。やがて遠ざかっていったが、いずれも顔の片面には皮膚がなく、そこから血がゆっくりしたたっているのを見た。

かれらはぼくの衣類をことごとく剥ぎとったが、どれにも血がついていた。かれらが食事をはじめると、割ったパンからはぼたぼたと血がこぼれた。そして、死んでいくひとの呻き声のような、笑い声を立てはじめた。

やがて、かれらがいなくなると、その手が触れたものは、羽目板も、階段も、床も、いずれも赤く染まっていた。

ぼくは胸が苦くなり、生肉を食ったような気がした。

そして、はつきりとしなが鋭く、ながい叫び声がきこえた。窓や扉がゆっくりと開き、風にがたがた鳴り、また叫んでいた。まるで異様な唄みたいで、それがひゅうひゅういうたびに、細身の短刀で胸を裂かれるようだった。

た。

あるいはまた、——川沿いの、花の咲き乱れた緑の野原のなかだったが、——ぼくが母と一しょにいと、川岸を歩いていた母が転落した。水が泡立つのを見た。渦は大きくなっていき、突然消えた。水はふたたび流れはじめた。すると、きこえるのは、藺草のあいだを流れ、葦をたわませる水の音だけになった。

突然、母がぼくに呼びかけた。「助けて！……助けて！……さあ、坊やったら、助けてよ！ あたしを！」

ぼくは、草のうえに腹這いになってじっと眼を注いだ。抗いがたい力でぼくは地面につながれていたが、叫び声はきこえていた。「溺れる！ 溺れる！ 助けて！」

水は流れていた、澄みきって流れていた。そして流れの底からきこえてくるその声は、ぼくを絶望と怒りの淵に沈ませるのだった……

五

ぼくはざっとそんな具合に、夢想家で苦勞知らずだった。生来の独立心と冷笑癖も相まって、自分で一つの運命をこしらえあげて、恋にみちた生活の詩を思い描き、十六歳という年で可能なかぎりの思い出に生きていた。

学校は厭でたまらなかつた。上品で氣負つた魂が、ひとと接して傷つけられたとたんに示すあの深い嫌悪は、面白い研究になるかもしれない。ぼくは、規則正しい生活とか、時間をきめられた時計の生活とかいうものを、どうしても好きになれなかつた。それでは思索も鐘で止まらなければならぬし、すべてが数世紀、数世代にわたつて前もつて下ごしらえされていることになる。そうした規則正しさは、きつと、大多数のひとには都合いいだろう。だが、詩情や夢や幻想に養われ、恋やたわいもないことばかり考えている、哀れな子どもにとっては、無上の夢をたえず醒まされることだ。その子を一瞬も休ませないということだ。その子が恐れもし嫌つてもいる、物質主義の常識づくめの一般の環境のなかにつれこんで、窒息させてしまうことだ。

ぼくはいつもひとりだけになろうとした。たずさえるのは韻文集か、小説か、詩の本など、何でもいい、うまい感じの感動をもち、それを得たいと切望している青年の心を、わくわくさせる類のものをだ。

バイロンやヴェルテルの文章を、あのころどれほど楽しんで貪り読んだか、いまも覚えている。ハムレットやロミオ、そして現代のもっとも情熱的な著作物、要するに魂を歓喜にとかし熱狂させる、そういう作品をこと

ごとくどんなにか夢中になつて読んだものか。

こうしてぼくは、北国のあのきびしい詩情を撰取した。バイロンの作品のなかで、まさに海の波のように轟きわたっている詩情だ。最初に読んだときから、ぼくはよくその章句をそっくり暗記し、心にくり返したものだ。ちやうど、あるシャンソンが氣にしていると、その旋律がいつでもつきまとつてくるようなものだ。

幾たび口にしたことだろう、「異教徒」の冒頭の《そよとも風吹かず》を、あるいはまた「チャイルド・ハーロルド」の《かつて在りし日のアルビオンに》とか、《おお、海よー われは常に汝を愛したり》とかを。仏語訳の氣が抜けていることも、独自の思想の前では姿を消し、思想はあえて言葉をまたずに自分の形式をもっているかのようなつた。

燃えあがる情熱のそういう特徴が、辛辣な皮肉と結びつくとき、熱しやすくて初心な性情に強く働きかけるのは当然だった。古典文学の華麗ないかめしさには見られなかつたその反響は、ことごとく、ぼくにとっては新たな香氣を、あの巨人の詩へ絶えずひきつける魅力をもっていた。それは読者を眩惑し、無限の底なしの淵へ陥らせる。

こうして、教師たちがいったように、ぼくは趣味と心